

テーマ : 「臨床判断能力の育成を目指した科目設定と授業方法の工夫」

カテゴリー : ③ 教育方法 (演習)

1. 学校概要: 学校名: 組合立静岡県中部看護専門学校 所在地: 静岡県焼津市東小川一丁目6番地の9
課程名: 3年課程 1学年定員数: 40名 修業年限: 3年

第5次カリキュラム改正において、看護基礎教育で強化すべき能力に「臨床判断能力」が挙げられた。この「臨床判断」を行うための基礎的能力の育成を目的とした自校の取り組みを報告する。

自校では、新カリキュラムとして、基礎看護学の中に臨床判断Ⅰ・Ⅱ・Ⅲという科目を新設した。段階的に臨床判断の思考を身に付けられるように、2年次に臨床判断Ⅰ・Ⅱ、3年次に臨床判断Ⅲを履修する。臨床判断Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの授業はすべて演習とし、グループワークとシミュレーション学習により展開している。クリスティン・タナー氏の臨床判断モデルの思考過程に基づき、臨床判断Ⅰでは「気づく」力の強化を図る。対象の状態を1年次で学んだ解剖生理や病態生理の知識を活用して予期し、事例患者の状態や変化を捉え、対象に何が起きているのか解釈するシミュレーションを行う。臨床判断Ⅱでは、臨床判断Ⅰの授業での学びを活かしながら、「気づき」「解釈」からさらに「反応」「省察」の一連の思考過程を経験する。池西静江氏が提唱する反転授業を参考にし、学生個人で事例患者についてのアセスメントを行ってから授業に参加する。授業では教員が演じる患者の変化を捉え、反応の仕方を考え実践する。臨床判断Ⅱの単位認定試験はOSCEを実施し、実際の言動のみならず、実践後の振り返りを教員と学生とともに行う。学生が何に気づき、解釈して反応(行動)したのか、思考発話を促しながら臨床判断の思考を確認する。臨床判断Ⅲでは、患者の変化の気づきから始まり、現状を改善するための看護援助まで実施する。リアルな臨床場面(終末期にある患者との関わり)を再現し、患者のコンテキストも考慮しながら思考することを求める。患者に起きている問題や苦痛に対する看護援助を「反応」とし、適切な援助の実施をグループで考え実践する。臨床判断の「気づき」から「反応」までを振り返り、事例における最善についてクラス全体でディスカッションする。そして、行為後の省察をとおしてして学生各自で自己の課題の明確化に努める。

履修時期	科目	時間・単位	到達目標
2年次 6~7月	臨床 判断 Ⅰ	15時間 1単位	1. 既習の知識・技術を活用し、対象の状態を予期する。 2. 対象の状態を把握し、変化に気づける。 3. 対象の状態・変化を解釈し、対応を考えることができる。
2年次 10~12月	臨床 判断 Ⅱ	15時間 1単位	1. 対象の状態の予期から、対象の状態・変化を適切に解釈する。 2. その場の状況から、適切に判断し、コミュニケーションを図りながら対応する。 3. 自己の看護実践を振り返り、実施の評価と自らの行為について省察する。
3年次 4~5月	臨床 判断 Ⅲ	15時間 1単位	1. 臨床を想定した場面から、必要な対応を考え、実践する。 2. 実践した援助を、臨床判断モデルに基づき振り返り、看護者に必要な判断能力を養う。 3. 自己の看護実践の振り返り、看護実践の課題を明らかにする。

3. 実施後の評価

学生による授業評価からは、臨床で正しい判断や必要な観察をするための知識の必要性を実感した、自己の課題に気づけた、といった意見があった。2年次の臨床実習で、患者の変化に気づき、予測されることを意識しながら、患者の現状を探ろうとする学生の姿が見られた。2年次の段階では見られなかった姿であり、臨床判断という授業の成果かもしれない。3年次の臨床実習での学生のあり様からも評価していきたい。今後も効果的な教育方法を模索し、臨床判断能力の育成を目指していきたい。

